

広島県・医療法人 達磨会 井上病院

〒721-0974 広島県福山市東深津町3丁目23-46
http://www.inoue-byouin-fukuyama.jp/

- 理事長・院長：井上文之
- 設立：2002年
- 病床数：38床
- 診療科：呼吸器外科、呼吸器内科、消化器外科、
消化器内科、外科、内科、放射線科、
リハビリテーション科



呼吸器・消化器領域に特化して大規模病院並みの手術実績を誇る

トップレベルの肺がん手術実績

広島県福山市東部の住宅や店舗などが立ち並ぶ幹線道路沿いにある医療法人 達磨会 井上病院（井上文之理事長・院長・38床）は、専門科として呼吸器外科、呼吸器内科、消化器外科、消化器内科、外科、内科、放射線科、リハビリテーション科を揃え、呼吸器、消化器領域の手術を中心とした専門性の高い医療に特化した病院で、小規模病院でありながら、特に、肺がん手術ではこれまでに総合病院並みの実績を誇り、地域において絶大な信頼と高い評価を得ている。

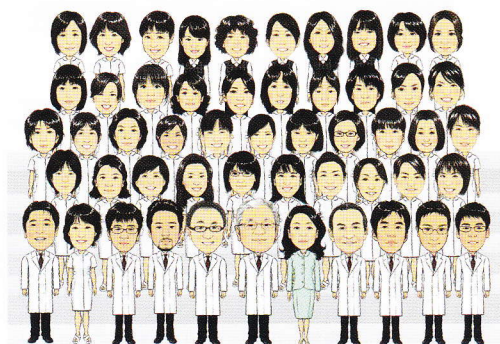
正面玄関を入り風除室を抜けるとすぐにエントランスロビーがあって、右に受付、左に薬局が配置されているが、その空間はいかにもアットホームな雰囲気を醸し出している。そこから右の廊下に沿って各種検査室、診察室などが続く。突き当たり左が新たに増設したリハビリテーション室だ。正面玄関側に車寄せがあるが、駐車場は同院裏手にある。

現在、福山市をはじめとした広島県東部、岡山県西部からの外来患者1日平均122人、手術は年平均100件前後で、これまでに評判を聞いて遠方から来た患者も多数あるという。

同院は平成14年（2002）、井上理事長ともう一人の医師の2人で、19床の肺がん手術のできる有床診療所として、現在地の福山市東部に井上クリニックとして開院した。井上理事長49歳の時である。

以来、同院が現在の地域医療における立ち位置を鮮明にしてきたことは、それまでも実際に呼吸器外科を専門とし、岡山大学医学部附属病院第一外科（当時）勤務時には肺がん治療の責任者を務め、その後に勤務した広島市民病院、福山医療センターでも肺がん手術のエキスパートとしてその治療実績を積み上げてきた井上理事長のこだわりによるところが大きな理由だ。

開院わずか2週間後に、記念すべき第1件目の全



職員集合似顔絵（山口勝三氏作）8年前の作品なので皆少々若い
が、アットホームな本院の雰囲気が伝わってくる。

身麻酔手術が行われたのを皮切りに、これまでの17年半以上に及ぶ間、患者が途切れたことはない。平成20年（2008）には、有床診療所では全国初の日本呼吸器外科学会専門医制度の関連施設となった。

このころから年間の全身麻酔手術数が増加するようになり、100件前後に到達した。そのため診療所としての機能では対応が難しくなってきたことから、同年に診療所北側に隣接する土地を購入し新棟を増築することで38床に増床し、「井上病院」に業態転換した。この時、地域における呼吸器医療のレベルを高めたいという井上理事長の思いから、約50人収容の会議室を設けた。ここでは、地域の医師が集っての情報交換、勉強会、研究交流などの取り組みや、地域住民を招いての講習会などが行われている。

さらに、開院13年目の平成26年（2014）には、全身麻酔手術が累計1,000件を超えた。診療所時代も含めたこの規模の病院としてはこの実績は特筆ものだろう。現在は累計で1,800件に達し、その6割以上が肺がん手術だ。

同院では、井上理事長が肺がん手術におけるステント治療のスペシャリストということもあり、ステント治療についてもまた、トップレベ

ルの実績を誇っている。

ちなみに井上理事長は、平成11年（1999）にはステント治療の会（呼吸器イノベーション研究会）の初代会長を務めている。さらにこの会は、後に日本呼吸器内視鏡学会のサテライト研究会である呼吸器インターベンションセミナーとして発展したが、平成28年（2016）の第21回呼吸器インターベンションセミナーでは、井上理事長が世話人を務めた。

迅速な検査、診断、そして治療

同院の診療の特徴は、患者に対する十分な説明と同意（インフォームドコンセント）を重視し、患者およびその家族が納得できる医療の提供をプログラムすることから始まる。患者およびその家族の納得の上に次のステージに踏み込んでいくことこそが効果的な医療につながる。これによって患者の積極的な“医療参加”が促されるからだ。

検査、診断が迅速であることも大きな特徴の一つだ。大規模病院ではCT検査が2、3週間後になることもあり、初診から検査結果を知るまでに1カ月以上かかることも少なくないが、



正面入口



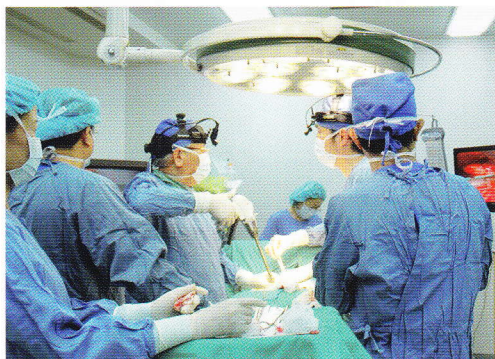
外来待合
ロビー



駐車場 平面と屋内（3階建てビル）と合わせて70台が駐車できる。風雨を気にせず院内に入れる屋内駐車場は患者・家族にも好評。



会議室（3階）広々としたスペースは、会議のみならず様々な活用している。手前にあるのは卓球台で、スタッフのリフレッシュの場にもなっている。



オペの様子



常勤医師五人衆 右から森 雅信副院長、岡林孝弘副院長、井上理事長、高橋正彦診療部長、西川敏雄手術部長



CT室



レントゲン室 診療放射線技師藤原さん



外来診察室 森副院長。オペ前の忙しい時にもっこり



内視鏡室

同院では、例えば肺がんの診断に必須である16列マルチスライスCTを所有し、外来で必要と判断した場合、すぐにCTを撮り、撮影が終わると、担当医は診察室に送られてきた画像を見ながらその場で患者に病状を説明する。これによってその日のうちに治療方針が決定できる。そのため、検査やその結果説明を受けるために何度も通院する必要がない。

また、この画像を外部の放射線科専門医に読影を依頼し、ダブルチェックに努めている。このダブルチェックは重要である。患者の咳などの主訴から肺のCTを撮った際に写った他臓器（脾臓、肝臓、腎臓）にがんが見つかった例も少なくない。

同院では、年間100件を超える全身麻酔手術

の半数以上が、胸腔鏡下手術（肺がんを中心にした外科手術を含む胸腔鏡手術）を含む開胸肺切除術だが、呼吸器疾患に加えて消化器疾患の外科手術もまた得意としている。手術はどれも経験が豊富で高い専門技術を持つ5名の常勤専門医（ほかに非常勤医師10名）によって施行される。「メンバー全員が同じポリシーを持っていることと抜群のチームワークが当院の強みです」と井上理事長。

しかし、こうしたことができるのは小規模病院だからというわけでもなさそうだ。この理由は、同院の医師をはじめとするスタッフの圧倒的な肺治療のプロフェッショナルとしての情熱と誇りがあるからで、検査、診断から手術に至るまでの治療全般に高度な技術が培われている



カンファレンスの様子 週1回全職種が集まって活発なミーティング。NSTの取り組みも充実している。



「はい」のスペシャリストを目指す。



外来化学療法室 点滴ならびに外来化学療法に使用するベッドとリクライニングチェアタイプ



調剤室 右奥はクリーンベンチ



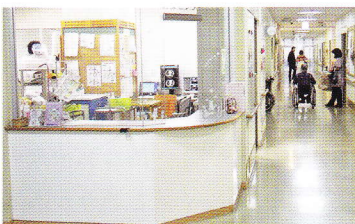
食堂・談話室



栄養部門 調理室 病院食を内部提供している。美味しさのヒミツはこの笑顔？



DI室 社会福祉士の松前さん。患者家族が退院後の相談に



「患者一人一人と向き合い、一緒に医療ができる病院でありたい。」

からにはほかならない。それに井上理事長のコメントから時折感じられる医師、看護師をはじめとする同院スタッフへの信頼感が醸成されているからだろう。

同院の以前の手術実績の内訳を見れば、やはり7割以上が胸腔鏡下手術を含む肺切除であったが、それからさらに時間を経た今日、胃がん、大腸がん、肝臓がん、膵臓がん、胆石などを対象にした消化器手術も増えたことにより、同院全体の手術件数は増加の一途をたどり、手術対象疾患の比率は変わってきている。

だが、小規模病院としてのキャパシティにおける悩み、課題もないわけではない。このまま現状の“看板”を守っていけるかどうか…。しかし、井上理事長は「病院を大きくすることで経営的なバランスを崩してしまっては健全な医療が施せません。ここはしっかり見極めながらこれからを考えます」と慎重だ。それでも「地域医療機関との連携もしっかりと進めていきます」と井上理事長。地域に根差した地域住民に信頼され支持される病院としての立場は忘れない。

「ベストサポートケア」をチームで推進

一方、外科手術だけで完結する病院ではない。患者は治療中や治療後に様々な症状や合併症を併発することもあるということを踏まえ、その点でも迅速な対応を心がけている。これが同院が推進する、必要に応じて細やかな処置と誠実な対応で患者の安定した治療経過や安心感に貢献できる「ベストサポートケア」だ。

例えば、手術の執刀医が術後の治療をフォローしていることもその一つで、退院後の容体悪化時に迅速な入院も可能であり、手術をした医師がすぐに必要な処置を行う。特に肺がん患者の場合、様々な症状や合併症を引き起こすことが多いが、このきめ細かな対応が治療成績や患者のQOL向上に大きく寄与しているそうだ。これこそが専門特化型の小規模病院だからこそ

できる体制である。その結果、同院における体制の“すそ野”は思いのほか広い。

同院では開院以来、禁煙外来を開設して年間200～300人に禁煙指導を行っている。これは「常に呼吸器専門病院の重要な役割の一つとして、禁煙によって肺がんや肺気腫のリスクを減らし、予防や啓発を進めていきたい」という井上理事長のたばこの害に対する強い思いによるものだ。禁煙指導件数においてもその指導内容においても、全国でもトップレベルの実績がある。もちろん、80人の職員に喫煙者はいない。

こうした同院の“旗印”が明確で散漫にならない方向性は、医師のみならず看護師やリハビリテーションスタッフも十分に理解しやすいともいえる。やはり構成員のベクトルが一致したチームの力は大きい。その意味で同院の院内チーム医療の力は最大限に発揮できているように見える。

院内を歩くと何カ所かに掲載(19頁)のような理事長以下職員52人(現在は80人の職員が在籍)の集合イラストが貼られているのを目にする。それぞれが“いい顔”で描かれている。「当院の10周年にイラストレーターの友人が贈ってくれたものです」と井上理事長。ロビーで取材の合間に出会った外来患者に聞くと、「このイラストの雰囲気こそが同院の雰囲気そのもの」だと話してくれたが、そういえば取材時のいろんな局面でそんな印象を抱いたものである。

同院では行動指針として「言葉より心」、「聴き上手でありたい」、「明るく元気に挨拶を交わす」、「良き医療人である前に良き人でありたい」、「職員同士仲良く、尊敬しあい、気軽に挨拶を交わし、チームワークよく報告連絡する」、「アットホーム的な親密感があり、かつ大病院に負けない医療レベルを持った小病院になりたい」ということを謳っている。同院は、専門医療の構築とこの行動指針の実践で、今や地域住民からも医療機関からも頼られる大きな存在となっている。